

——明治期『読売新聞』の“女学生”をめぐる言説について——
小杉天外 「魔風恋風」論

文学研究科

言語文化学専攻 国語国文学専修

二〇二二年度

M19LC505

吉井よし 美稀みき

目次

はじめに	1
第一章 「魔風恋風」の成立	3
第二章 明治期の女子教育	6
第一節 鹿鳴館時代まで	6
第二節 良妻賢母教育と女性の自立	7
第三章 女学生をめぐる言説	13
第一節 “学問をする女性”へのまなざし	13
第二節 墮落する女学生	15
第三節 『読売新聞』の女学生攻撃	20
第四章 女学生のめざめ	30
第一節 初野に関する考察	30
第二節 “新しい女”の誕生	38
第五章 脚気による死——〈肺病のroman化〉を出発点に	43
おわりに	51

凡例

- ① 「魔風恋風」の本文引用はすべて『読売新聞』初出に拠る。
- ② 仮名遣いや促音・拗音の表記は原文のままとした。ただし、漢字・くずし字は現行通用の字体に改め、明らかな誤字・誤植は訂正した。
- ③ 初出原文は総ルビだが、当て字・読みにくいと思われる箇所のみ付した。
- ④ 作品名・論文名は「」、新聞・雑誌・単行本名は『』、引用文は◇で括った。

はじめに

小杉天外（一八六五～一九五二）の「魔風恋風」は明治三六（一九〇三）年二月二五日から九月一六日まで『読売新聞』に連載された。全一九〇回。美貌と才智に恵まれた女学生を主人公に、友情と三角関係を描き、女学生の墮落（この場合、異性と性的関係を結ぶこと）に焦点を当てたこの作品は、当時の女学生バッシングブームの風潮の中で大評判を呼んだ。同時代の受容状況、現代に至るまでの評価は土佐亨が一通りまとめているので、簡単に紹介しておきたい。連載中に刊行された春陽堂版の単行本全三巻のうち、中編（明治三七年一月）と後編（明治三七年五月）の巻末に「魔風恋風前編評判記」が摘記収録されており、同時代評の一端を窺い知ることができる。残念ながら巻号は未記載だが、各批評の筆者である当時の新聞・雑誌の記者は、文章や会話の面白さという技術面を評価する一方で、通俗な描写（『万朝報』、深刻味の不足（『北鳴新報』）、露骨な描写に対する不快（『帝国文学』）、登場人物の性格の曖昧さ（『白百合』）などを批判の対象に挙げている。本作の商業的成功によって一躍人気作家の座を手にした天外は、同時にその通俗性と題材に対する非難から、本作によって文学史における作家生命を終えた。昭和になってからも初期の円本全集などに収録され、大衆に広く読まれはしたものの、類型的な通俗小説以上の評価は与えられなかった。土佐は（明治三十年代を代表する通俗小説という以上に記憶されない、死んだ古典）と結んでいる（一）。明治期の墮落女学生を扱った作品としてまず取り上げられる本作だが、主人公である萩原

初野は最期まで肉体的にも精神的にも墮落せず、むしろそれと戦いながら脚氣に罹り死んでゆく、いわば“名譽の戦死”を遂げる。かつて同じ女学生を主人公とし人氣を博した明治三二（一八九九）年の菊池幽芳「己が罪」、本作の連載終了から約一年半後に『読売新聞』紙上に登場した明治三八（一九〇五）年の小栗風葉「青春」と比べても、初野の人物造形が女学生らしくないのである。その要因の一つともなっている初野の思い描く名譽、名声、立身出世は当時どういったものが想定されていたのか、また、女学生バッシングの中で初野のような女学生像はどう受け止められ、作者の天外がどう描こうとしていたのか、当時の女子教育における『読売新聞』の特色や方針を探るとともに、「魔風恋風」が連載されていた同時代的意義というものを、本論から導き出すことができれば幸いである。

第一章 「魔風恋風」の成立

当時『読売新聞』の看板だった尾崎紅葉が明治二七（一八九四）年頃から陥ったスランプにより、相次ぐ休載から経営陣との関係に軋轢が生じ、連載の再開を望む読者からの投書の山と発行部数の減少に紅葉の立場は悪くなっていた。明治二八（一八九六）年、「多情多恨」の連載を終えた紅葉は、未完の大作「金色夜叉」に取り掛かるが、連載と休載を繰り返した末に休止すると、『読売新聞』を追放同然に退社し、すでに胃癌に蝕まれていた病身をおして『二六新報』に移った。紅葉退社後の『読売新聞』の売り上げの低下は甚だしく、苦境に立たされた経営陣は人気回復のための作家獲得に奔走した。そこで白羽の矢が立ったのが、自然主義を採り入れた新しい写真主義文学の作家として台頭していた小杉天外である。『読売新聞八十年史』は、「一部からはいんとう（淫蕩）文学と非難もされたが、青年男女間の人気に投じ、自然多くの読者を開拓した」と本作の人気を伝えている（三）。

連載に先駆けて二月一日と二二日に掲載された予告には「今の女学生を捉へて題目と爲し描き来つて百回に亘るべき一大写真小説」と称し、「写真主義の本領を發揮して」（千態万容の実景を描写）（三）しようとする意図が述べられている。「千態万容の実景」とあるように、本作で描かれる女学生観は同時代の社会的言説を反映している。天外が作品発表後も何度となく初野とその他主要人物の实在性に言及している（四）のは、当時の社会問題を写實的に描こうとした天外の作家としての気概とも受け取れるが、モデルの示唆とそれを裏付けるかのよ

うな女学生にまつわる醜聞の数々によって、読者に現実味を感じさせ、関心を惹きつける戦略の一つになっていたともいえる。こうした実話仕立ての手法は、徳富蘆花「不如帰」が大山巖の娘信子と三島通庸の息子彌太郎との悲恋をモデルにしているように、家庭小説に分類される作品においては流行していた^(五)。土佐はこれらの天外の証言を総合して、本作の構想期間と思われる明治三五（一九〇二）年の春から連載開始までの約一年間、学生の不良行為を報じた『万朝報』の三面記事を調査し、具体的に天外が創作に取り入れた可能性のある記事を推定、考察している^(六)。

本作の第一回は、颯爽と自転車に乗った初野が転倒事故を起こす場面から始まる。これからの初野に待ち受ける運命を暗示させる不穏な展開は、この時点で初野が迎えることになる破滅を決定づけており、読者はどのようにして初野が転落してゆくかを期待しながら読み進めることになる。菅聡子は本作が成功した一因として語りの方法を挙げ、^(七)「初野の〈墮落〉という枠組みを明示した上でその〈墮落〉の過程を語る、いわば「どうなるのか」から「どのようなようにして」墮落するのかへと読者の興味を転換させるものであった」^(七)と述べている。続きを待望されながら度重なる休載の末に中止のやむなきに至り、貫一とお宮が“どうなるのか”は永遠の謎となった「金色夜叉」に比べ、「魔風恋風」の展開は読者を裏切ることがなかった。天外は「その頃の文壇に驕威を恣にする或る一派が、写実主義を標榜しながら、自己の小趣味の陶醉から脱し得ず、徒らに技巧を弄するを能事とするが如き態

あるに慊らず、更に客観に徹した創作を試みんとして稿を起した（八）という。この（その頃の文壇に驕威を恣にする或る一派）とは他ならぬ紅葉率いる硯友社を指している。（何も紅葉さんに頼らなくとも、おれだってひと奮発すれば、どうにかなると思う）（九）と徳田秋声に語った天外は、硯友社を敵視し、紅葉とは犬猿の仲ともいうべき間柄だった斎藤緑雨の弟子になった（一〇）。「金色夜叉」のあとを継ぎ、社の命運を賭けた「魔風恋風」を執筆することは、天外にとって紅葉に対する挑戦でもあったといえるだろう。

第二章 明治期の女子教育

第一節 鹿鳴館時代まで

江戸時代から続く女訓書において重視されてきた理想的女性像は、夫や舅姑に仕えるよき妻、よき嫁が求められていたのに対して、明治維新以後は国家的視点から女性は子供を産み、教育する母親としての役割が注目されるようになる。明治五（一八七二）年に発布された「学制」の理念を述べた「学事奨励に関する被仰出書」では、実学主義の教育観に基づき、農工商に加え婦女子もまた学問の機会を与えられ、身分を問わず立身出世のための教育が必要であると示されている（二二）。すべての国民がくまなく教育を受けられるよう小学校の義務教育を唱え、「学制」施行に先立つ着手の順序には、次代を担う国民を養成するために将来母となる女子の教育の有無がその子供に強く影響を及ぼすので、女子教育の必要性が説かれた（二三）。このような女性の子を導く母親としての役割への着目が、女性は児童を教育する最良の教師であるという主張となり、女性教員養成機関である女子師範学校の設立につながっていった。国家的視点から価値づけられた当時の賢母養成論は、小山静子のいうように女性を近代国家建設のための国民を養成する手段として、目的が従来の“家”から“国”に変化しただけで、女子教育に対する高い理想をもっておこなわれたわけではないといえる（二四）。

明治一六（一八八三）年の鹿鳴館完成がもたらした欧化政策の推進は、明治維新後の日本人の社会生活に変革を与え、西欧志向の女性論が隆盛した。その主張は論者によって種々多

様だが、男性優位の封建家庭から脱却し、男女同等の社会に改革するためには女性の地位を高める必要があるという点で共通している(二四)。西欧の思想を輸入した先駆的な啓蒙書の訳出や欧米の現状を紹介した本の出版により、これらの日本への定着を図ろうとする中で、しだいに経済的な独立、婦人参政権、廃娼など婦人運動の色彩が強まっていったことは、明治一〇年代に最盛期を迎えた自由民権運動の流れとも無関係ではない(二五)。欧化主義の象徴的存在であった森有礼文部大臣の暗殺と、鹿鳴館が払い下げになる明治二三(一八九四)年までの世相は婦人界にも影響を与え、連日新聞や雑誌を賑わせたが、鹿鳴館時代の華やかな西欧文化を摂取していたのは中流以上の婦人たちであり、その裏では不況にあえぐ下層の女性たちの身売りや、労働条件の過酷さからくる女工のストライキの続出、自由民権運動の言論弾圧による婦人運動家の投獄がおこなわれるなど、矛盾に満ちた時代であったと秋枝蕭子が指摘している(二六)。

第二節 良妻賢母教育と女性の自立

この西欧文化をそのまま伝えるものとして、人気が高まったのがキリスト教系女学校であった。明治六(一八六三)年の禁制高札撤廃以来地道な宣教活動を続け、明治初頭の文明開化期に比べると圧倒的に日本に定着していたキリスト教のヒューマニズムの精神は、当時の日本女性に男女平等の人間の自覚を促し、女子教育の発展に大きく貢献している。当時続々

と創設されたキリスト教系女学校が表看板に掲げた高水準な語学教育や、キリスト教の精神が一貫された学校生活を受けて、地方の私立女学校にも欧化主義の風潮が波及してゆくが、婦人の地位向上を目指し社会の抜本的な改革を提唱する理想と、形式だけの欧化にすぎない実態が著しく乖離していたために、やがて欧化主義の女子教育は世論から非難を浴びた。その反動により、明治二〇年代には富国強兵の思想に基づく国家主義的な教育理念が生み出され、「強兵」を育てる“軍国の母”養成の精神と結びついた良妻賢母主義教育の思想が台頭することになる(二七)。

鹿鳴館時代を機に大きく躍進したかにみえた女子教育の熱はナショナリズムによる衰退を挟みながらも、明治三〇年代には良妻賢母の養成を目的に再燃した。その背景には日清戦争の体験があり、これまでの家庭の中にいて内助の功を尽くすだけの存在ではなく、夫を戦地に送り出すことのできる国家的な意識を持った女子の養成の必要が生じた。また、増加していたキリスト教系女学校への対策として公立高等女学校を設置し、女子への国民意識の強化を図った。さらに、看護婦をはじめ電話交換手、店員、銀行員などといった学歴が役に立つ女性の職業が増えつつあり、そのためには女子の就学が必要であった。ただし、女子にとつての職業は第二義的なもので、良妻賢母主義教育の理念上、嫁いだあとに起こりうる身の不幸に対する万一の備えとして捉えられた(二八)。当時の論調には、対象となる女子を上・中・下の三層に分け、良妻賢母主義教育の対象を中間層の女子に据え、それぞれ違う内容の教育

を施す必要があることが述べられている（二九）。

職業は男女に拘らず人間の務として必らず持つべきものなり。併し茲に吾人が女子に向つて職業を勧むるは殊更に独棲せしめんと欲して勧むるにはあらず、唯独立の土台を作る為めに之を勧むるなり。独立の土台とは何ぞや。女子は大抵男子に嫁するものなり、然れども縁なき時は嫁する事能はず、又縁ありても不幸にして良人の性質我が心に協かなはされば終生を共にする事能はざるべし。茲に於てか女子に独棲の必要あり、親の厄介になるは恥なり、財産の余徳に衣食するは恥辱なり。男子に嫁せざる女は必らず独棲せざるべからず。職業は即ち其の準備なり、女子に職業の必要を説くは第一に此の見地より割り出したるものなり。

且又女子に職業の必要なるは、強ち不縁の女と限らず、縁ありて嫁ぎしものも不幸にして良人を喪ふ事あるべし、その時に当つて家に余産なければ、子女の教育を完ふする事能はざるべし。故に人の妻たるものは必ず一の職業を覚へ置くの必要あり。但しこれは万一の準備をして置くものなれば、夫ある間は決して職に就くに及ばざるべし。

松原岩五郎『女学生の栞』（博文館 明治三六年）

女子に対する職業の必要を説いた職業案内書はこの頃すでに現れており、その論旨は欧米の女性が多数の職業分野に進出してゐる現状と比べて日本は後れをとつてゐるので、女子の

権利を拡張するためにも職業に従事しなければならぬことが説かれている。そこで、女子の特性を把握し、それに適した職業の選択が肝要であると述べた(三〇)。『万朝報』の記者であった落合浪雄の『女子職業案内』は、男女同等の社会生活をなしうるには女子の経済的独立の必要を説いている点で、当時としては先進的な主張であろう。

婦人も男子と相対して或程度迄の権利を持たねばならぬ、既に男子は生地いくちなくして、妻を養ふ事をも容易ならずとする時に何で婦人が男子に阿諛する必要があるらう、何故に男子専横なる振舞をされて屏息して居る必要があるらうか、女子は独立仕なければならぬのです、女子は此生地なき男子の助を受けざる為めと、同時に自己の権利を主張する為めに独立をせねばならぬ時節に際会したのであるのです。

落合浪雄『女子職業案内』(大学館 明治三六年)

女子の電話交換手の採用条件が「夫がなく、かつ家事に煩わされぬこと」(三二)からもわかるように、職業を持つことは未婚のあいだけの特権で、結婚すれば家庭に入り家事への専念が求められた。しかし、一部の進歩的な婦人解放論者たちの登場により、婦人の自覚が芽生えつつある中で、これらの女性は独身を誇りにし、世の女性のために尽くしていたのであって、学問のある女性は自己を活かすには独身主義者にならざるを得なかった(三三)。

「必然と在るでせう……、許嫁けの男とか、でなければ、約束した男とか……」と恭一も無理に莞爾と笑つて、「必然在ります、在るに違ひありません。」

「其様な者なんぞ……、」と初野は漸と答へたが、「お主婦は未だ帰らないんでせうか？」
「では、あなたは独身主義ですか？一生独身で居らツしやるのですか？」と少し前に進んで、「え、爾うですか？」

「如何なるんですか……、」男が余り熱心に聞き出したので、思はずも後退りした。

「魔風恋風」第八 画工の家（五）

「女で学問するのは、大抵まあ貴人の無ささうなのが、独で食つて行く用意なんさね。そりや何有、然ういふ徒が独身主義を振廻すのに文句は無いが、那して人並に生れて結婚せんてのは、第一此の、人間の自然に背くぢや無いか。僕は其れだから、女の学問したのは嫌なんだ。」〔中略〕

「〔前略〕僕の考では、今の女学生間に事実独身主義が唱へられてると為たら、其れは最つと深い処に原因が有らうと思ふので。一体是迄と云ふものは、唯もう女は従順なもの、大人しいものと云ふので、精神も肉体も双ながら束縛して了つて、全で人格も何にも無い一定の鑄型に押込んであつた。所が、近世思想の激しい潮流は婦人だつて巻込まずには措かない、さあ懷疑や煩悶や、其れに伴つて意志の自由だの、箇性の權威だのが犇々

感じて来る。我と云ふ物を切実に意識して、其の自意識の發展から我と人生の衝突……
〔中略〕独身主義の根底には必ず此の衝突が含まれてるに違無いので。して見ると、我々
現代青年の煩悶と動機は一つで、食つて行くから何うの、困らないから何うのと、那樣
パンや職業の問題では無いんでせう。尤も、婦人丈に然う男子のやうに露骨には現さな
いが、然し我と云ふ物を一度び意識した以上は、最う是迄のやうな箇人を無視した制度
習慣には屈従が出来なくなる、丁度イブセンの書く那云つた女主人公のやうに、夫の奴
隸、家庭の器械で甘んずる訳に自己が許さなくなる。けれども又、自由意志に因つて選
択された結婚、自由の愛情、自由の家庭と云ふものは、未だく今の社会で容易に得られ
さうも無い、其所で勢ひ独身主義を取ると云ふ順序になるので……〔後略〕

小栗風葉「青春」(『読売新聞』、明治三八年三月く三九年十一月) (二三)

ヘンリック・イブセンの「人形の家」が初めて日本に紹介されたのは明治二五(一八九二)
年で、翌年には高安月郊が訳載をはじめている(三四)。夫と子供を捨てて家を出る主人公ノラ
の人物造形は近代の女性解放思想に多大な影響を与え、平塚らいてうら“新しい女”の登場
を促した。また、高山樗牛が先導したニーチェイズムの流行による個人主義の誕生や社会主
義思想の勃興、イブセンやトルストイの翻訳紹介、さらに明治三六(一九〇三)年には藤村
操が煩悶を懷いて華嚴滝に投身自殺を遂げており、明治三〇年代は思想的にみれば複雑な様
相を呈していた時期であつた(三五)。

第三章 女学生をめぐる言説

第一節 “学問をする女性”へのまなざし

初野が籍を置く帝国女子学院は、祝賀会に皇后が臨席するほどの名門校であり、少なくとも工芸科、文科、音楽科が設置されていることが物語の冒頭で語られ、初野自身は英語が優秀な学生と描写されている。池田稔によると、英語教育は江戸時代の保守的な良妻賢母ではなく、外国の事情に通じ、高い見識をもった女性をつくる^(二六)ねらいに基づき、当時の中等普通教育における主要科目の一つであった^(二七)。英語教育を重視していた女子教育機関は官立の女学校およびキリスト教系女学校に大別されるが、欧化主義への批判から女子教育熱が衰退してゆく中で、経費節減のために官立の女学校は次々と閉校していった。したがって、明治三〇年代においては英語教育の主流はキリスト教系女学校であり、大森郁之助は明治女学校を想定して書いた可能性を指摘している^(二七)。

こうした教育を受ける女学生は少数に限られ、女子教育には裁縫、料理、家事などの実用的な教育、あるいは書道、茶道、生け花といった女性のたしなみを身につける情操教育が求められた。人目に立つ海老茶袴を穿き、自転車に乗り、男子学生と同じ普通教育を受ける女学生はお転婆で生意気な存在だと批判されたのである^(二八)。同時代の文学作品は、男性作家が女性の言葉を借りる形で“学問をする女性”への非難を語っている。

夫人はまだ学校へ通ひし頃より、負惜みの強いのと愛嬌の乏しいので人に知られ、「あのやうな気前では嫁入りをしてからがどうでせう。何を言つても学問の外には取所とりえのない人ですものを。」と器量自慢は窃ひそかに譏そしり、「教育の学問のと申しても、女の学問は知れたもの。学問で台所は出来ませぬ。生中なまなかちツとばかり見識があると、高くとまるのが女の持前。権利だの同権だのと、齒の浮く事を言はれると、よッぽどの美人でも二度と見る気は出ぬものと、此間こないだも宿の言はれました。」と意気な細君の聞えよがし。

坪内逍遙 「細君」(『国民之友』附録、明治二二年一月) (二九)

「〔前略〕そしてまあ、かうやつて、お暮し遊ばして在らつしやれば、なるほど、学問を遊ばしたのが、お邪魔になるでございませう。源氏をお聞き遊ばしたのも、英文をお綴り遊ばすことも、書てのお見事なもの、仏蘭西のお出来なさいますのも、何んなにか、お邪魔になるでせう。……あなた。」

あるじは顔の色かはりぬ。唇をばふるはせつゝ、
「はい、邪魔になつて、邪魔になつて、邪魔になつて、邪魔で、邪魔で、邪魔で、私や何だつて、つまらない、学校へなんぞ行つたんでせう。邪魔で、邪魔でしやうがありません。」

泉鏡花 「X蠟螂鯨鉄道」(『江湖文学』、明治二九年一二月) (三〇)

殿井も下宿のおかみと初野の噂話をする中で(『第三下宿(三)』)、へ女子をんなが学問して何に成

るんだ」と理解を示してはいない。その内容は男子でも学問して成功するのは一握りなのに、ましてや女子が稼げる給料では生活するのがやつとだという。これまでみてきた非難がいわば“女らしくない”ことに根ざしているとするなら、殿井が批判する主旨は現実に即した就職難、男女間の賃金格差によるものである。実際、女性教員養成の使命のもとに女子師範学校の設立が急がれたのは、児童の教育には男子より女子がふさわしいと考えられていた事実よりも、男性教員二名の俸給で女性教員三名を雇える魅力にあった(三三)。それに対し、おかみのへ女子学院の本科を卒業したとなると、未だ未だ猶と取れます。去年卒業なすつた方々……矢張り拙者共に居らした方ですけれど、広島の学校へ、五十円で抱へられて行きましたものへ、へ給料取にお成りに成つたら、五十円の物は七十円も八十円もお取りなさるでせうよ」という言葉は、当時の女学生の就職先にはやはり教員が想定されていたのだろうが、現実の就職状況はおかみのいうような甘いものではなかった。殿井を介して語られる天外の言葉はまっとうな批判であり、少なくとも天外には“学問をする女性”への性的偏見はなかったものと思われる。

第二節 墮落する女学生

初登場(「第一 記念会」)でへすらりとした肩の滑り、デードン色の自転車に海老茶の袴、髪は結流しにして白リボン清く、着物は矢絣の風通、袖長ければ風に靡いて、色美しく品高き

十八九の令嬢」と描かれる初野の装いは俗に“海老茶袴”と呼ばれ、明治三九（一九〇六）年の夏目漱石「坊つちやん」にも「花月巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァイオリン、半可の英語でべら〜と、I am glad to see you」^(三二)という戯れ歌の一節が登場しており、その普及は本田和子によると明治一八（一八八五）年開校の華族女学校の制服制定に求められるという。

女生徒たちは、明治五（一八七二）年に開校された東京女学校が認めた男袴から帯付きの着物へ変わり、そしてさらに鹿鳴館の開館にはじまる明治政府の欧化政策の波によって、コルセットを用いたバスル・スタイルの洋装の着用を余儀なくされた。つまり、女子師範学校や学習院が舞踊の稽古を学科目に加え、舞踏会での女性の踊り手不足を補うべくおこなわれた、外交のための国家に対する奉仕であった。しかし、その洋装姿もコルセットの着用から起きる健康被害への批判（その実女性の洋装に対する非難）が取り沙汰され、明治二六（一八九三）年頃から和服に戻りはじめる。それもかつての帯付きの着物ではなく、着物に袴と靴の着用を義務付けた“制服”として。宮中の女官を模したこのスタイルは彼女たちを“女学生”という一般の女性とは区別された特異な存在であることをしるしづけた。帯やコルセットといった腰を締め付ける道具からの解放は彼女たちを活発にしたが、それは身体そのものの変貌、とりもなおさず性に対する奔放さを象徴するものとして人々の視線を変えてゆくのである^(三三)。

去年の春、女学生の醜聞が世間に喧ましくなかつた頃までは、帝国女子学院の認可下宿として、十に余る室は常に満員の繁昌を続けたものであるが、校則改正の結果その認可も取消されて、急に今日の淋しい有様、親戚とか何とか事情を作為へて居る二三名の他は、悉く女子学院ならぬ、名も聞えぬ女学校の学生、それから今一段高い職業に転じ度がツて居る看護婦とか産婆、まだ給料に有付かぬ女教師、始終医師に通ふ子宮病患者、と云ふ様な輩のみ下宿して居るのだ。

「魔風恋風」第三 下宿（一）

明治政府の欧化政策を皮切りに勃興した女子教育の熱は、明治一五（一八八二）年の東京女子師範附属高等女学校の開校と、それに伴う明治三二（一八九九）年の高等女学校令の公布が追い風となって、女学生の数は飛躍的に増加する。（去年の春）が明治三五（一九〇二）年だとすると、高等女学校の生徒数だけでも明治一五（一八八二）年の二八六人に対して二一五二三人にもなっている（三四）。もちろん、女学生が増えたということはそれだけ女学校も増えたということであり、へ悉く女子学院ならぬ、名も聞えぬ女学校の学生」とはそうした現状を表している。また、地方から上京してきた初野のような女学生に『読売新聞』は痛烈な非難を浴びせ（三五）、さらに女子教育は家庭と連絡した上でおこなわれるべきという考えのもと、監督者の父兄が身近にいない下宿生はただちに墮落に走るものとみなされた。下宿生の

不品行を嘆く記事(三六)や、下宿生の通学を禁じている女学校も存在していたことがわかる(三七)。初野をこのような環境下に設定した天外の意図は明白であり、読者もそれを感じ取っていたであろう。初野に与えられた境遇は、彼女を墮落に導く舞台装置の役割を果たしているといえる。

明治二〇年代に入って女学生の存在が目立ちはじめると、女学生に対する批判的な言説も現れるようになる。問題とされたのは主に性にまつわる風評だが、欧化政策を推進するための英語教育についても取り上げられた。ほとんどの新聞は女学生を攻撃する記事を掲載し(三八)、『読売新聞』もまた例外ではない。明治二三(一八九〇)年二月二〇日から二八日まで「女学生の醜聞」、明治二四(一八九一)年九月五日から一二日まで「女学生の醜聞」と題したシリーズを連載しており、特に「女学生の醜聞」では寄席で男客を誘惑するもの(三九)、教師と関係を持つもの(四〇)、友人の許嫁を奪うもの(四一)など、異性関係を扱った内容がすべてといってよい。しかし、これらの醜聞の多くは捏造され、女学生ないし女性が学問をすることに對する反感、西洋的な思想や文化に対する抵抗感(四二)から、攻撃対象は当時続々と創設された(名も聞えぬ女学校)ではなく、キリスト教系女学校の有名校が槍玉に挙げられた。このような女学生へのバッシングが、先に述べた女学生の飛躍的な増加により、いっそうの激しさをもって新聞紙上を賑わせた時期が明治三〇年代であった。

女学生バッシングの先鋭を担った『万朝報』と『二六新報』は、有名人のゴシップ記事を

売りにしていただけない、男女が肉体関係を持つまでの過程、売春、性病の罹患、妊娠と墮胎などきわめて刺激的な内容の記事を数多く掲載している(四三)。「読売新聞」もたびたび女学生の墮落について報じているが、明治三五(一九〇二)年一〇月一七日から十一月二一日まで連載された「女子教育 諸大家の談話」は、当時の女子教育の権威が女子教育についての知見や墮落女学生に対する女学校側の対策などを語っており、学生読者が圧倒的多数を占めていた『読売新聞』の特色(四四)を窺うことができよう。「魔風恋風」はこの第二次女学生バッシンググブームの潮流に乗るべく連載を開始した作品でもあった。

「私計しぢや無いよ、姉様の事も始終悪く云つてるよ。」

「孰せ爾うだらうよ……。」と初野は顔を顰めて、「私、最う其様な事は聞き度くない。」
「だつてね、家へ来る人達がね、姉様の事が新聞に出たツて云ふと、なアに、女の学問なぞ知れたもんだ、今に男でも拵らへて、私生児でも産む位のものさ、なんてね……。」

「魔風恋風」第九 同胞(三)

「萩原様、今の態は、彼は何と云ふ態です？」

「……」初野は泣出した。

「何故貴女は此室へ入ったのです？ 何の為に此室へ入ってるんです？ 今の様な、彼様な猥褻な事が為たさには、今の女学生には、学資に窮して、淫売を為る者があると云ふ事だが、貴女は其様な人ぢや無からうね……？」

作中で初野に対して向けられる罵倒は、当時の女学生攻撃の典型的なものである。真銅正宏は本作の手法を“覗き見”や“立ち聞き”、そして“噂”の側面から考察しており、初野の噂話を読者が“立ち聞き”することによって、その情報の信頼性を読者が別の視点から求める形で、テキストと読者との往還関係が成立しているという^(四五)。この場合、マスメディアが流す女学生の“噂”をお波なり子爵夫人なりの登場人物が“立ち聞き”し、それを初野に伝聞するというある種の反転した構図をとっているが、真銅のいうように、“噂”の形式上、作品内においては作者の直接的な説明より信頼性が劣るため、“噂”の出所がマスメディアの一方的な報道であることが読者の判断を鈍らせる結果となり、殿井の現実問題に裏打ちされた批判に比べると、世論の受け売りにしかすぎない初野への罵倒は、彼女が墮落女学生になりうる危険性を匂わせる文章としてはあまり効果的とはいえない結果に終わっている。

第三節 『読売新聞』の女学生攻撃

1

明治二三（一八九〇）年二月一八日の朝刊、『読売新聞』は「女学生の品行」と題した社説を載せた。近頃喧伝されている女学生の品行についての噂は、我々が目撃あるいは伝聞した

話であり、全く根拠のないことではないと主張した上で、〈或新聞紙〉の〈某ドクトルの確かなる話なりとの事に安心して書くも忌はしきは此頃何が故にや女生徒の身の上にして一種の病に罹るもの少からず其病毒の流布せる範囲はなかなかひろしと云ふ〉という報道を取り上げた。〈或新聞紙〉とは『日本』だが、『読売新聞』は〈余輩わがはいは他社の記事までも保証する能はず〉と逃げ道を作りながらも、女学生のあいだに起こっている性病の蔓延は、このような醜聞が伝わることそのものが嘆ずべき事態として、〈余輩わがはいこゝに断言せん向後若し女学生の所行に就て醜聞を聞込時は遠慮無くこれを紙上に記載して余す所無かるべし〉と、不品行を働く堕落女学生への攻撃を宣言した。この記事から端を發した騒動の顛末は以下の通りである。

『女学雑誌』の主宰で当時は明治女学校校長でもあった巖本善治は、これまでの醜聞のほとんどが捏造されていることに勘づいており、前項で述べた「女学生の醜聞」の連載について、女学生の名と学校名を読売新聞社に問い合わせた。しかし、相手の返答は不明瞭をきわめ、巖本の疑惑は深まっていた。そこへ、匿名の投書により今回の〈某ドクトル〉なる人物は私立医学校の学生にすぎず、性病の蔓延も廃娼論反対の立場から作り上げた根拠のないでっち上げであることを知った。巖本は日本新聞社に記事の詳細な回答を求めたが、結果は読売新聞社の場合と同じであった(四六)。『女学雑誌』に掲載した今回の記事の一件を受け、日本新聞社に訂正と謝罪を求める長文の投稿があったにもかかわらず(四七)、日本新聞社側は醜聞

に關する虚偽を認めるどころか謝罪もしなかった。真相が暴露され、記事にこれ以上の進展はなかったが、女学生を子に持つ多くの家庭に混乱を引き起こした醜聞は、たいした訂正もなく、おそらく虚偽の報道であるとも認知されぬまま、大衆の記憶に残ることになった(四八)。

この醜聞騒動の影響か、『読売新聞』は墮落女学生を扱った記事に誤りがあるとすぐさま訂正文を掲載している。例えば明治二四(一八九一)年三月一七日期刊の、遊女上がりの女学生が次々と男を手玉に取って金を巻き上げているという記事(四九)に対して、当事者と思われる人物から抗議の投書が届き、それを記事の取り消しとしてそのまま掲載した。

拝啓貴社新聞第四千九百四十一号(三月十七日)雑報欄内に(又しても女学生話)と題して鳥取の士族阿武文蔵の娘に蜂子云々縷々御掲載有之候処其事項中阿武文蔵娘とあるは其氏名とも私の父に類似して居候より考ふるに該事項は全く私に恨みある者が私を毀けんとするの悪意より事実を構造し記載せしに外ならず候間此全文を掲げ速に御取消被下度此段及御照会候也

明治廿四年三月十七日

「以下住所氏名のため略」(五〇)

また、くだんの「女学生の醜聞」の翌年には「女学生の弊風」の連載を開始しているが、その序文が人を食っていて興味深いので左に掲げておく。

女学生の醜聞が世人を驚かしたるは昨年おほいの事なりしが其頃は読売新聞も悪むくまれ役の一人として随分有難からぬ攻撃を受けしことありしも為に大に女学界の腐敗を防ぎたれば今となりては口に苦かりし良薬も却て其効を奏したるを喜ぶの人あるに至りたり然るに近頃は何となく薬の効き目もゆるみたる様子にてポツ／＼醜聞の種を耳にする事なるが手短かに劇薬を調合するのも一利一害なれば今度は寧ろ手柔かに一般女学生の弊風を適示して各自の注意を求め置き尚ほ治効を奏せざる時に於て更に処方くわを改むることとすべし勿論女学生の弊風と云うても際限もなきことなればこゝには只其の服装、挙動、言葉遣ひを始め試験のゴマカシ、授業中の不体裁、寄宿舎の悪風、写真道楽、骨牌の流行、似え而非せ信徒等の事に付き其極めて著しきものゝみを挙ぐべし（五二）

冒頭、言外に含んだ書き方で昨年の一悶着に触れている。墮落女学生への攻撃が（大に女学界の腐敗を防ぐ）いと自負する一方、それをへ口に苦かりし良薬として世間に投与するのモリスクがあつて憚られるので、今回は（手柔かに）女学生の贅沢な服装やお転婆な性質、金遣いの荒さに乱暴な言葉遣いを論じてお茶を濁そうという。かつて『女学雑誌』からの糾弾に対し、（余輩わがはいは記せり女学生に質を置く者あり女学生に姦淫を為す者あり私生の子を産める者ありとこれらの事女学雑誌記者は目して醜聞と謂はざる乎人類の醜行ならず女学生の醜行ならずとする乎記者が奉ずる基督教のモラルはこれらの醜行とがを尤めざる歟女学雑誌記者

は実に寛大なる人なり寛大なること通な叔父さんの如し基督教信者には似合はしからずと評せざるを得ざるなり^(五二)と挑発した強気な態度とはうってかわって、いささか及び腰になつたようである。ただ、女学生への攻撃をこれまでの性的な話題から教育的な観点に舵を切つたことが、約一〇年後の「女子教育 諸大家の談話」の連載につながつたともいえるだろう。

2

「女子教育 諸大家の談話」の取材に応えた顔ぶれは(カッコ内は紙面で紹介された肩書)、細川潤次郎(華族女学校校長)、高嶺秀夫(女子高等師範学校校長)、成瀬仁蔵(日本女子大学校校長)、西澤之助(日本女学校校長)、藤田文蔵(女子美術学校校長)、下田歌子(華族女学校学監)、跡見花蹊(跡見女学校校長)、林吾一(東京府女子師範学校校長)、小林彦五郎(立教女学校校長)、黒田眞洞(淑徳女学校校長)の一〇名で、計二九回連載された。純粹にキリスト教系女学校といえるのは立教女学校のみで、あとは官立と私立がほとんどである。共通の意見としては女子教育において肝要な学校と家庭との緊密な関係や寄宿舎の厳格な取り締まり、そして下宿生の排除が語られているが、中でも渡辺女学校(現・東京家政大学)を名指しし、醜業婦と処女を同じ場所で教育させないよう学校を二種類に分け、醜業婦を集めた学校は特別な規則を設けて取り締まるべきだと語る西澤之助の談話^(五三)は、今日の価値観でみれば珍妙な意見と言わざるを得ない。また、高嶺秀夫の談話の「エスコルト」(引用者注…エスコート)が付いて居ないで歩行する者は、男子から充分な侮辱を受けて差支のない淫売

婦の如く認められる（五四）という一文は、初野が夜道に一人でいるのを巡查に（此様な暗い、草原に横臥し居つては、無宿の乞食か、左なくは、淫売婦の類と認められても苦情は云へんでせう）（第三十一 わかれ（四））と見咎められる場面を思い起こさせる。これらの談話の中で、最も読者からの反響があったのが成瀬仁蔵と思われる。成瀬は女学生が墮落する要因の一つに男子学生からの誘惑を挙げ、（男子の学生が墮落した数は、随分夥多おびたしいから、女子を墮落させるのは、男子が誘惑するので、女子自から墮落すると云ふのは、実に僅少わづかな者でありませう）と女子よりも男子の涵養が急務であると述べている（五五）。数日後の投書欄には成瀬の論を支持する投書が掲載された。

女学生問題に関する成瀬仁蔵君の語らるゝ所は実に尤もだ、全体情欲的關係からの墮落は決して独りでは不可能の話だ真に女子のみを責むるは酷も甚しい、殊に多く男子の誘惑に出ると来ては罪は益々男子にあれば是をこそ戒責して貰ひたい（後略）（豊多摩落合生）

（明治三五年一〇月二七日朝刊）

『読売新聞』の投書欄「葉がき集（ハガキ集）」には、以前から女学生の墮落に関する持論や目撃談が寄せられており、女学生攻撃に対する賛成意見も多くある。まずはその中から調子が激しいものをおいづつまんで紹介する。

女学生攻撃大賛成なり小生の近辺にこの輩が横行して実に汚らはしいほどだつんつるてんに巻襟の具合実に何ともいへぬほど殺風景だテ（高齋生）

（明治三三年五月九日朝刊）

女学生攻撃熾さかんにやらかすべし全体あの髪かみの結びやうが気に入らず十八九の大きなづう、体肩上げしてづんぐりむつくりの背を無理に高く見せんとか行灯袴と胸高に結んでそれで靴でも穿く事か吾妻下駄の坂になつてゐるのか木履ぼくりの禿はげげちよろになつてゐるのを穿つて大道狭しと列ならび行く様実に見るも不吉なり（成人生）

（明治三三年五月二〇日朝刊）

成瀬の談話に対する支持の投書が掲載された一〇月二七日以降から、投書欄では女学生の墮落に関する話題は、女子よりも男子に責任があるとした主張を中心に論戦が繰り広げられている。

▲墮落々々と警鐘でも乱打する様に海老茶袴を見れば直ぐ腐敗を連想されるので妾憤わたくし慨で堪りません、僅か九牛の一毛といふのでしようが其れも原因もとは男が悪るので『誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ』と云ふ例もある通り誘ふ水があればこそ誘はれるのですワ其れを何でも女の罪にするのは餘りお酷いワも少し男の方が品格を上げて行ひを矯正な

さいよ（赤坂の翠子）

（明治三五年一月三日朝刊）

▲翠子の所論は如何にも御同感ですが女学生の墮落はあながち男子のみを責むるは無理ではありませんか即ち御引証の「誘ふ水あればいなむとぞ思ふ」とは如何どですか甚しきは其腐敗せる女子に又誘はれる男のあることは一般に認むる所でありますから今後御互に男女子共に品格を高むることに致したいと思ひます（赤坂の恋不知生）▲赤坂の翠子攻撃、凡て女学生の心さへ清廉潔白であるならば誰が海老茶袴を見て腐敗を連想するでありましょうか男子より女の方が却つて品格を上げ行ひを方正にしなければなりません、第一ワの字が癩だ（赤坂の一人）

（明治三五年一月一二日朝刊）

▲女学生攻撃も一寸下火になつたが今度は男学生だんに一撃を加へたら何うですか、女学生には随分冤罪もありませうが、男学生は實際に於て幾ほとんど全部道徳的に罪人であると思ひます、赤坂の翠子さんとやら先づ貴嬢から一矢酬ひては如何です（一公子）

（明治三六年四月一八日朝刊）

▲女学生が墮落するのは女学生自身の罪といふより周囲の境遇が悪いからだ方今殿井的

のハイカラ書生が到る処女学生をつけねらツてゐる僕はコノ小説を読んで一大教訓を得た天外先生シツカリたのむぜ（遠慮無用生）

（明治三六年五月二五日朝刊）

本作の連載中は登場人物の言動に絡めた内容のものが散見される。種類は現代でいうファシニレター的な作者への応援から初野の今後を心配する声（五六）、文章と挿絵の齟齬に対する指摘（五七）、（遠慮無用生）のような主に殿井を引き合いに出した注意喚起など多岐にわたる。

▲妾は口惜しくつてよ、女学生はやれどうの、こうのつて……真個に一寸したことでも、直ぐかれこれ云はれるんですもの、一人がさうだから皆がさうだとは云へないわ、男の方だつて、やれ大学だの何んのつて大きな事ばかり云つて居る人が家ではトランプ外ではテニスに狂つて机の上には新聞紙に雑誌ばかり教科書なんかは隅の方に小さくなつて居るんですもの……世間ではこんなものを矯正しないで妾等ばかりを……それは偏頗と云ふもんだわ（あさひ子）

（明治三六年六月二四日朝刊）

先に見た（赤坂の翠子）のように、投書の差出人には女学生からと思われるものも多く、『読売新聞』の読者層には女学生も含まれていたことが窺える。もちろん、編集者が介在し

ている以上、投書すべてを本物と断定はできない。しかし、馬場伸彦がいうように、読者が能動的に紙面に参加することによって形成された共同体には、虚構と現実の区別はさほど大きな問題とされないようである（五八）。

他紙に追従する形で女学生バッシングを開始した『読売新聞』の論調は、しだいに専門家を交えた女子教育論にシフトし、最終的には読者をも巻き込んだ共同体へと成長した。これら能動的な読者の参与は、明治三四（一九〇一）年五月一五日からの「当世百人娘」や、明治四〇（一九〇七）年二月一四日からの「都下女学校風聞記」にもみることができるといえる。その流れにあって連載を開始した「魔風恋風」は、当初は墮落女学生を扱った写実小説の立場をとりつつ、もはやその枠を超えた“女学生”という一大コンテンツの中に組み込まれていったのではないだろうか。

第四章 女学生のめざめ

第一節 初野に関する考察

1

第一回で自転車から転倒した初野は病院に搬送される。そこで初野に付き添う看護婦たちが「夫は別嬪なの、全く別嬪なの。目の大きい、鼻の高い、色なんぞは、宛然まるで透通る様に白いのよ」と立ち話をしている（「第二病院（一）」）ように、初野はまずその美貌から人々の注目を浴びている。しかし、初野にとって自分の美しさは異性関係を噂されたり素行を疑われたりする、いわば墮落と結びつこうとする枷にしかならず、実際に初野は殿井や夏本子爵といった男性によって身の危険に晒されるが、最期まで墮落から己の身を守ることができたのは、彼女の持つ知性にほかならない。

一方で、初野が将来経済的に自立するための手段であり、精神の抛りどころともなっている学力の優秀さについては、初野に同性愛的な愛情を寄せている女教師の校長からの見舞を口実にした打算的な行動（「第六 意外（二）」）や、初野の優秀さを下宿のおかみから聞き及んだ殿井の手練手管の出しに使われる（「第五 入院料（十）」）ばかりで、作中で正当に評価されているとはいえない。初野はこれらの甘言を信用し、自分の優秀さが世間に認められていると錯覚してしまう。そのため、初野は「墮落生」といわれているような他の女学生と同一視されることを懸命に否定する（「第六 意外（五）」）。しかし、学問よりも良妻賢母の育成を教育

理念に掲げていた明治三〇年代において、初野の学力は他者に対してなんの優位性をも持ち得ない。女学生を取り巻くネガティブな言説の中に身を置いていた初野は、墮落を期待する周囲の眼と戦い（五九）、やがて心身ともに追い込まれてゆく結果となる。

地方の財産家の娘に産まれながら、妾腹であるために当主の義兄とは折り合いが悪く、実家からの自立と学問に励むことで得られる立身出世を夢みている初野の名誉と名声に対する自意識の高さは、作中で随所にみられる。殿井からの借金を断ったことも、ひとえに名誉を気にする初野の自尊心ゆえであるが、それは学資の仕送りを打ち切られ、これからの経済的困窮が目に見えている現実とはひどくかけ離れている（六〇）。

校長からの見舞を受けた初野は、卒業試験を優秀な成績で合格し、その先に約束されている（と初野は信じている）立身出世への決意を固めるが、殿井と夏本子爵からの暴行未遂、そして子爵夫人からの痛罵をきっかけに他人への依頼心を捨て、独立することを強く意識するようになる。その意識はしだいに初野の性格にも変化をもたらしており、終始一貫して純粹で心優しい性格の持ち主として描かれる芳江とは対照的になっている。

絹子の知って居る所では、初野様と云ふ人は他で評判する様に只だ美しい、只だ温和しい計りで無く、心の奥の方には、男児の様な確乎した思慮を蔵つて居る人とは思つて居た。けれども、此うまで情の強い、此うまで思切つた事を口にする人とは思はなかつた。

熟は分らぬが、何でも余程深く芳江様を悪く思つて居るに違ひ無い。如何なる事情が、彼程親い二人が間を隔てたものやら、私も、芳江様の情に厚き言に感激したとは云へ、何処までも旧の親しい間に復すと誓つたのであるし、また初野様の此の様子を見れば、容易ならぬ苦勞をして居るらしい、何うしたら平常の温和い初野様に復して、芳江様の彼の有情い心を解らせる事が出来やう、

「魔風恋風」第廿一 質屋の門（三）

東吾との恋が破れ、芳江と東吾の結婚を妨害しようと思ひ初野に対し、どこまでも疑うことなく初野を姉として慕い続け、東吾と結婚できなければ死ぬ覚悟でいる芳江。最終的にヒロインとしての幸せをつかむのは芳江であり初野ではなかつたことは、菅（六一）、天野勝重（六二）によつて指摘されている。

卒業さへすれば、世間にさへ出れば、立身、名誉、幸福、思ふ儘なる我が身では無いか、その卒業も、少に一と月の中では無いか！ なんぼ可弱い女でも、荒い浮世の波を此処まで漕ぎ来たつて、直ぐ手の達く岸に上らずに、此のまゝ押流されて成るものか、苦しくとも、辛くとも、仮や病の重るとも、正可に試験前に倒れる様な此の身では無からう、否、地を嚙つても倒れることではない！

天には神も在ますであらう、道理の光、情の温かさ、此の明い世の中で、我が望のみ破

れる事が何で有らうぞ！ 卒業も、独立も、決して我が欲を充さうと云ふ為では無い、第一は不幸の母に、老後の孝養がして見たく、また二つには、不憫の妹を立派に教育して、姉妹二人が理想の生活、清い家庭の模範とも称へられ様。昔罵られた兄や嫂、母の素性まで洗立て、嘲つた近所の人達にも、屹度言を更めさせて遣らう。姉妹帰省の折は、贅沢と云ふ程で無くも、美しく揃ひの物を着て、土産も郷里には珍しい物を持つて、亡父上の墓参、親類への見舞、彼が妾上りの後妻の娘かと、蔭口にも驚嘆させねば止まぬつもりである！

「魔風恋風」第廿九 まよひ（三）

初野の意識の変化は、卒業試験の合格に対する強迫的なまでの執着にも表れている。しかし、具体的な卒業後の展望について初野の口から語られることはなく、彼女が依頼心を捨て、卒業を乗り越えた先に得られるであろう名誉と名声とは観念的なものでしかない（六三）。それだけに、社会的上位者に対しては独立への決意も容易に揺らいでしまうほど脆い。たとえ自分の貞操を脅かした殿井であっても、勢いのある社会評論家というお波の雇い主の金村から将来有望な画家と聞いただけで、掌を返すようにへ如何に目が無いと云つて、彼様なに蔑視んで、彼様なに恥辱を与へて……とへ思はずも赤面（第十五 よわり気（十））し、お波が提案する殿井への借金について思案する。初野が重きを置く名誉と名声は同時に他人への

評価軸ともなり、それらを得る資格のある人物は相応の地位に就くのが当然だと信じている。だからこそ、金村の妻が初野と同じ帝国女子学院の卒業生で、優秀な成績を残した人物でありながら、肺病の夫を支える普通の主婦として暮らしている現実や、帝国大学の法学士というエリートコースを自ら外れようとする東吾の行動が理解できないのである。いくら初野が〈若い男の助力を得て、何事も其の意見に従はねばならぬ身と成つて、仮しや心は乱さずとも、それが為^{たすけ}に有らぬ浮名を唄はるゝに峻^{くろ}ぶれば、何の辛い事が有らう！〉（第廿一 質屋の門（一））と女子としての一身独立を息まいても、結局は東吾という男性に依存せざるを得なかった。初野と東吾の関係性において、当初から初野には主体的立場が与えられず、後半になるにつれて初野を中心とした物語は東吾の立身出世をめぐる物語に取って代わられてゆく（六四）。しかし、東吾に恋する初野は〈私は、何うでも貴方の御意見通りに成る心算^{つもり}なんですもの〉（第三十一 わかれ（七））と問題解決を東吾に委ねることしかできない。そして、〈結局は、自分は男の意見に従ふより他に詮^し方が無い〉（第三十五 胸の中（三））という語り手の説明が入り、物語の主導権は完全に初野から東吾に明け渡される。

「……然うとも、最う此うなれば義理も友誼も有りアしない……、嫉妬^{エネビ}ると云はゞ云ふが可い、私だつて、他人^{ひと}の為めに生れたんぢやあるまいし、散々感情を玩弄^{もてあそ}ばれて、彼方^{むかふ}の都合で抛出されてそれでも、徳義を守つて従順^{おとなし}くして居るなんて、其様^{そん}な義務は

有りアしない、無いとも、其様な義務が有つて耐るもんか、器械ぢやあるまいし、奴隷ぢやあるまいし、私だつて一個の人間だわ、ヤングレデーだわ、彼の人達の恋を成就する為めに生きて居はしないわ……、然うとも、最う構ふもんか、何うなツても構ふもんか……。」

「魔風恋風」第三十七 遺書（一）

東吾の裏切りを知り、全てを悟った初野は物語の中に自分の居場所を取り戻そうとするが、病に蝕まれた身体にはもはや目的を遂行する力は残っていないなかった。かくて東吾は芳江との結婚によって立身出世への道が示され、物語は幕となる。

2

ここで、初野が執拗にこだわる立身出世とは、明治三〇年代においては一般庶民の中でどのように考えられていたのかを整理しておきたい。明治維新を迎え、身分制度が廃止されると、これまで身分内の上昇移動に留まっていた立身出世は、「学事奨励に関する被仰出書」〔注一一参照〕の公布、明治四（一八七一）年の『西国立志編』（サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳）や明治五年（一八七二）年の『学問のすゝめ』（福沢諭吉著）の爆発的な売れ行きなどによって、身分を問わず学問さえ修めれば富と名声が得られるという理念を持った立身出世主義の思想として普及した。近代国家建設のための次代の国民を養成するには、優秀な

人材を特定の身分だけではなく幅広い範囲からの確保を考えた明治政府の政策と、当時のベ
ストセラーが生んだ相乗効果によって、人々の立身出世への熱は高まった。ただし、明治前
期の立身出世主義の担い手は士族層の子弟が中心であり、封建社会の中で身分相応の生き方
を教えられてきた一般庶民への浸透は、就学率が上昇する明治後期まで俟たなければならな
かった。日清戦争を勝利し、新世紀の幕開けに対する希望に燃える国民意識を背景に、明治
三五（一九〇二）年頃から出版社はこぞって“立身出世”、“成功”を売り文句にした雑誌や
書籍を出版している。この年に創刊された村上濁浪主宰の雑誌『成功』は、苦学生や学歴の
ない庶民を中心に多くの読者を獲得し、明治三〇（一八九七）年に実業之日本社が創刊した
雑誌『実業之日本』とともに“成功ブーム”と呼ばれる明治期の社会的上昇欲求を牽引した。
さらに、明治一八（一八八五）年の内閣制度の確立による官僚体制の近代化に伴って、明治
一九（一八八六）年の「大学令」から創設された帝国大学は翌年の「文官試験試験補及見習規
則」が定めた官僚養成の規定ルートとなり、明治三〇年代には社会的地位が高い職業と出身
校が結びついた、いわゆる学歴社会が成立しはじめたのであった（六五）。

これまでみてきたように、雑誌や政府が想定する人物像、すなわち学歴取得のための受験
競争に身を投じ、立身出世を成し遂げるのは苦学に励む庶民、あるいはエリート青年であつ
て、決して初野のような女学生は含まれていなかったことはいままでもない。『西国立志編』
のヒットで大量に出回った類似本の一つ、干河岸貫一編『日本女子立志編』（博文館 明治三

五年）で取り上げられているような、近世からの忠孝貞節に生きた賢女烈婦が、当時の大多数が思い描いていた女子の模範的人間像だとするなら、初野の立身出世観は女学生よりむしろ青年男子のそれとほぼ変わらない。

また、竹内洋は立身出世への動機解釈としていくつかの類型化を試みており、そのうちの一つに「ヘルサンチマン的立身出世主義」がある。職業・教育・婚姻・世襲など様々な外的要因による社会的地位の変化を意味する社会移動の多さを示す「開放構造」と、社会的地位の上下関係が顕在化して身分的地位になる「身分的上下構造」が共存する日本の社会構造において、実業家の立伝はしばしばこのルサンチマンが立身出世の動機になっているという。つまり、上位者からの抑圧や侮蔑に憤慨し、「今に見ている」という発奮が立身出世の動機につながっているのである。さらに、この「ヘルサンチマン的立身出世主義」は、立身出世の不成功がただちに敗北と意識される「カチ・マケ的立身出世主義」を媒介して、「驚倒（功名）的立身出世主義」になる（六六）。初野は今まで侮辱してきた義兄や周囲の人間への復讐（ルサンチマン）によって立身出世に駆り立てられ、そのための絶対条件である卒業試験の合格が失敗に終わることは、初野にとっては学歴の取得という立身出世へのパスポートが失われる以上に、墮落女学生の社会的言説に敗北することであった。自分を墮落と結びつけようとしていた世間を驚かすには何がなんでも立身出世を成し遂げ、虐げられていた母と妹を救い、故郷に凱旋しなければならぬという見方ができるだろう。

第二節 “新しい女”の誕生

近代的な女子教育制度が確立した明治三〇年代、同時期に活躍していた女性教育者たちも良妻賢母を理想に掲げていた。先に紹介した『女学生の葉』には、附録として下田歌子、津田梅子のほか、三輪田学園創立者の三輪田眞佐子、廃娼運動などに尽力し女子学院初代院長を務めた矢島楫子、共立女子職業学校（現・共立女子学園）創立者の鳩山春子、新渡戸稲造とともに東京女子大学を創立した安井てつ、東京高等女学校などの校長を務めた棚橋絢子という七名の女性教育家の論説が収録されている。例えば、矢島楫子は女子は男子と同等の教育を授け、人格の陶冶と教養を身に付けてこそ良妻賢母になれること、女子にも職業が必要であるが、下女や乳母任せで家政を蔑ろにしないよう専門的な職（現代の感覚でいうとパートタイマーに近い）に就くべきこと、また棚橋絢子は欧米には独立自営する女性が多いが女性としての値打ちがなく、それに対し日本の女子は学問して自己研鑽を積み値打ちが出て玉の輿にも乗れるので独立する必要はないこと、何より女子は結婚して家内を治めるのが当然であり、家政の余暇にはそのための学問を身に付けるべきで、働きに出るはその任務を尽くす資格がないことを説いており、女性教育者のあいだでも家庭と職業の両立については意見が分かれていたようである。この問題は、女性の経済思想の向上と職業参加を推進していた下田歌子、鳩山春子、嘉悦孝子らの女性教育者にも例外ではなく、良妻賢母主義の思想が正当化されてゆく中で、三好信浩は「良妻賢母に傾斜すればするほど、家庭婦人の役割を重

視するとう、一種の自縄自縛に陥つてゝいたと指摘している（六七）。

明治末期から大正期にかけて、女子の職業が社会問題や労働問題と結びつけられるようになり、「職業婦人」という言葉も生まれてくる。三好によると、この女子職業問題の解決の思潮が社会思想家の森戸辰男によつて女子職業放任論、女子職業否認論、女子職業条件改善論の三種に大別されている。女性が過半数を代表する日本の工場労働者のうち、八割を占める織維女工の教育が社会問題となつたが、根本的な解決には職業に従事する女性の内面の自覚が必要だとして、女性解放論が登場する（六八）。当時、森田草平との心中未遂事件を起こして名を挙げた女性解放論者の平塚らいてうが、「新しい女」を標榜して『青鞥』を創刊したのは明治四四（一九一）年のことである。

“新しい女”という呼称が誕生し、一分野を築いたのは一九世紀後半のイギリス文学に端を発するとう。女性作家のセアラ・グランドが雑誌『ノース・アメリカン・レビュー』の一八九四年三月号に発表した評論において、初めて“新しい女”（ニュー・ウーマン）という言葉を用い、「フランダーズの犬」（一八七二年）で知られる女性作家のウィーダがそれに対する論説を五月号に書いた。さらに、この応酬を当時の風刺雑誌『パンチ』が取り上げたことから、「新しい女」は因襲を破り新しい生き方を求める女性の総称として定着し、日本にもそのまま伝わっている。ただ、そうした女性の類型は“新しい女”の呼称が生まれる以前から文学や戯曲、現実の若い女性たちから出てきており、当時の社会に物議を醸していた。こ

これらの“新しい女”たちが提示した問題が従来の結婚制度への疑問、当時の性に関する社会通念の打破、そして母性に対する解釈であった。つまり、結婚を人生における選択肢の一つにすぎないと捉え、妻が夫に仕えるような主従関係ではなく、仲間や同志あるいは夫を導く女性上位の新しい夫婦関係を模索し、生殖目的以外での性関係の肯定、また母親となることを否定したり、反対に母親になることこそ女性に充足感をもたらすと考えたりした(六九)。

平塚らいてうをはじめ、日本女子大学の同窓生で構成されていた創刊時の『青鞥』が、創立者で初代校長である成瀬仁蔵の女子教育思想に強い影響を受けていたことは、多数の先行研究によって指摘されている。ここでは初期の“新しい女”を代表していたことは、多数の先行研究のように展開していったかについて述べたいと思う。『青鞥』発刊の辞の中で「私共女性も亦一人残らず潜める天才」(七〇)といい、その天才である女性の潜在能力の発揮を主張したりいうのは、「世の婦人たちへ」において現行の結婚制度を規定した明治民法や、刑法の姦通罪といった女性を抑圧する法律・制度を批判し、男性からの独立のための高等な精神教育と職業教育を要求した。

私共は今在来の婦人の生活を根底から疑つて居るのです。最早さういふ生活を続けることに堪へなくなつて居るのです。婦人は果して結婚すべきものかといふ事が已に、已に久しい疑問なのでございます。種族保存の必要の前に女の全生涯は犠牲にせらるべき

ものか、生殖事業を外にして女のなすべき事業はないのであらうか、結婚は婦人にとつて唯一絶対の生活の門戸で、妻たり、母たることのみが婦人の天職の総てであらうか、私共はもうこんなことを信ずることは出来なくなつて居ります。「中略」

それ故に私共は婦人のために出来る丈高い教育を要求いたします。一個の人たる婦人として男子の生活から独立してそれ自身意義ある女の生活の為に、高等な精神教育を要求いたします。又一方には経済上の独立のない処から生ずる様々な不安や、障害を取去るために、職業教育をも要求いたします。婦人が結婚によらない時、いつも、すぐ起つてくるものは職業問題でございます。

平塚らいてう「世の婦人たちへ」(『青鞥』、大正二年四月)(七二)

また、「差別的性道徳に就いて」では、結婚前に純潔を失つた女性は社会的に罰せられるが、男性の場合は性的な奔放さを容認されるどころか、結婚後の不貞行為さえも問題とされない、いわゆる性のダブルスタンダードを指摘しており(七三)、「処女の真価」で女性における処女の価値は「彼女には何時まで処女を保つといふことが、彼女自身の為に大切か」という個人的な問題であり、「不適当な時に於て処女を捨てるのは罪悪である如く、適当な時にありながら、なほ捨てないのも亦等しく罪悪」だとして、形式的結婚や売春、自らの欲求が存在しない処女喪失をも否定した(七三)。このらいてうの主張する「性と生殖における自己決定権」は、墮

胎や避妊にまつわる問題においても一貫しており、『青鞥』時代のらいてうの思想の中核をなしている（七四）。

果たして初野は“新しい女”になりうる人物だったのかという疑問が残る。初野が学問に励む理由をへ名誉ある女子学院の卒業生として、天晴婦人社会の学者と成らう為め計^{ばっ}かり（「第十七 診断（一）」）と説明しているところから、天外も女性教育者の想念はあったのだろ
うが、未来の独立した一人の女性として初野が持たされた夢は、実際の女性教育者が啓蒙し
ようとしていた良妻賢母でも、女性解放論者が模索していた新しい女性の生き方でもなく、
多くの青年男子が目標にしていた社会的地位と名声の獲得という、当時としてみればいびつ
な女学生像にならざるを得なかった。天外は初野を“新しい女”——とまではいかなくとも、
従来とは違った女の道を描こうとして描き切れなかったのだと思われる。

第五章 脚気による死——〈肺病のロマン化〉を出発点に

1

実家からの仕送りを打ち切られ、芳江との面会も謝絶され、金策の道を断たれた初野は栄養不良に陥り脚気に罹る。この“脚気”という病は、栄養学が進歩した今日ではほぼ忘れられた病気となっているが、明治期においては肺結核と並ぶ死亡率の高い病気^(七五)であった。その症状は（神経障害（感覚の障害、運動の障害）、筋肉障害（運動の障害）、循環器障害（心臓の障害）、水腫（むくみ）、胃腸障害、などを主な症状とする全身性の病気）、重くなると心臓麻痺（脚気衝心という）を起こして死ぬ。はじめは、脚の感じが鈍くなり、脚が重くなり、動きが悪くなり、膝がガクガクし、脚にむくみが現われ、食欲が減り、心臓が動悸し、動くと息切れがする、などの自覚症状が出る。^(七六)とあり、初野も初期症状で脚の痺れを感じている。

明治一七（一八八四）年に海軍軍医総監の高木兼寛が海軍の兵食改革をおこない、患者数および死亡者数の激減に成功しているが、鈴木梅太郎がビタミンB1の抽出に成功する明治四三（一九一〇）年まで、脚気の原因は脚気菌による伝染病説が根強く医学界を支配していた。医者が初野に〈転地治療〉をすすめていたり、東吾が初野の新しい下宿先の空気を気にしていたりする（「第廿五 義理（一）（二）」のは、悪い空気（瘴気）が脚気を引き起こすという考えも存在しており、様々な脚気の治療法が乱立していたことの証左でもある）。『読売新聞』の脚気

病者の自殺を報じた記事の多さをみても、当時の庶民にとって脚気が不治の病として恐れられていたかが理解される。

明治三三年七月一日 脚気に罹り井戸に投身自殺

八月二四日 脚気から神経病を併発し投身自殺

一〇月三日 湯屋の奉公人、脚気を苦に喉突く

明治三四年九月八日 脚気患者が井戸に身投げ、引き揚げられる

明治三五年七月一日 脚気が重く、船に乗れないのを悲観して船頭が首吊り自殺

七月二日 脚気に悩む船乗りが首吊り自殺

八月二六日 脚気を苦に首吊り自殺

九月一日 職人が脚気を苦に劇薬自殺を図る

九月一日 脚気に罹った人力車夫、妻と四人の子供を残して首吊り自殺

一〇月三〇日 脚気を悔やんでモルヒネ自殺

一二月七日 脚気が治らないのを苦に硫酸自殺

(以上、『読売新聞』より記事の要約)

ここで初野の死因について考えてみると、文学作品における女主人公の死には肺結核を取り扱ったものが圧倒的に多いことに気がつく。日本においては明治二二(一八八九)年に発

表された広津柳浪の「残菊」が嚆矢とされ、のちに徳富蘆花が明治三一（一八九八）年に「不如帰」で人気を博した。洋の東西を問わず、肺病患者の蒼白な肌、大きくなつた瞳孔に光を帯びる症状や、若くして肺病で斃れた芸術家たちの存在から、美人と天才が罹る病と考えられ、肺結核にロマンティックで甘美なイメージを与えた。福田眞人はこれを「肺病のロマン化」(七七)といっている。昔はこの「肺病のロマン化」の観点から、初野を死に至らしめた脚気は「何らのロマン性をも有し得ない」と指摘する。第一回の自転車からの転倒で負傷して以降、常に苦しむ姿が描かれる初野に、死をもたらす病として脚気が与えられたことは、病みやつれてゆく初野の醜さを強調させている。病によるロマン性を付与されない初野の身体は「その私的領域においては男性の欲望の対象となるかあるいは醜く病んでいるかの内実しか持たず、彼女の学問がそれに対して打ち勝つことは決してないのだ」と述べる(七八)。表象としての病を論じたスーザン・ソントグは、肺結核の患者が情熱的な人間として描かれる一方で、バイタリティや生命力の欠ける人間として描かれる例が多いという。この情熱とは愛であり、肺結核は恋の病の一つと考えられた。内なる情熱が肉体を消耗して燃え尽きる病が肺結核なのである(七九)。では、脚気は同時代の文学作品の中でどのように描かれていたのだろうか。

2

石川啄木は明治四二（一九〇九）年一月一日から二〇日まで『東京日日新聞』に掲載

した連作詩「心の姿の研究」の中で、夏の街に現れた脚気患者の葬列を描写した「夏の街の恐怖」を発表している。池田功によると、啄木とその家族はたびたび脚気に悩まされていたことが書簡や日記に綴られており、啄木にとっては直接の死因となった肺結核とともに、脚気もまた恐るべき病であった。題にもあるように、俳句では夏の季語に脚気が入れられているほど、夏という季節と脚気とは切り離せないものとなっている。作中で描かれている脚気患者の葬列が、実際に脚気による死者なのかどうかの説明はないが、いわば夏の風物詩として共通の認識を得ていたと思われる（八〇）。

病身の氷屋の女房が岡持を持ち、

横町の下宿から出て進み来る、

夏の恐怖に物も言はぬ脚気患者の葬りの列。

それを見て辻の巡査は出かゝった欠伸噛みしめ、

白犬は思ふさまのびをして

塵溜ごみたまの蔭ゆに行く。

石川啄木「夏の街の恐怖」（『東京日日新聞』、明治四二年一二月）（八二）

内閣統計局が作成した明治三二（一八九九）年から明治三四（一九〇一）年までの統計（八三）には、（三箇年ノ平均ニ拠レハ脚気死者ヲ出スコト最モ少キヲ二月ト為シ、五月ニ至リテ大ニ

数ヲ増シ、七月ニハ其ノ増加一層著シキモノアリ、八月ニ頂上ニ達シ、九月ハ尚ホ多ク八月ニ譲ラサル数アリ、十月に入りテ大ニ減シ、十一月ハ略ホ五月六月ニ同ク、十二月ハ又其半ハニ減シ、一月ニ至リテ僅ニ二月ヨリ多キノミ、此現象ハ明治三十三年ニ九月ヲ頂上ト為シ三十四年ニ三月ヲ最低時ト為シタルコトアルノミニシテ各年何レモ同一ナリとあり、五月から九月にかけてピークになるとされている。三四年の表をみてみると、五月の死亡者総数が六六三一二（男二二五、女九三）人、九月の死亡者総数が九二五六三（男一〇九五、女四一二）人である。「魔風恋風」の時間軸は二月から六月までと考えられる（八三）ので、初野が脚気の初期症状を覚えだした五月とほぼ一致するといつてよい。また、圧倒的に男性の死亡者数が多い。続いて年齢別では、脚気ハ肺結核ノ如ク身体發育ノ完成時即チ十五歳ヨリ三十歳ノ者ヲ最モ多数ニ侵シ三十歳ヨリ年齢ヲ加フルニ従ヒ減少し、職業別では書生・商人・官吏・手細工人の四つに分けた場合に、書生の割合が四〇・四二と半分近くを占めている。先に掲げた新聞記事より、自殺者の職業が（奉公人）、（船頭）、（職人）、（人力車夫）であることに注目したい。つまり脚気患者が最も多く、かつイメージされやすいのは、若年の肉体労働に従事している男子ということになる。

3

田山花袋もまた脚気に苦しめられた（八四）作家の一人である。花袋は明治三七（一九〇四）年、日露戦争に遼陽会戦直前まで従軍したのち、三年後に「隣室」、その一年後に「一兵卒」

（『早稲田文学』、明治四一年一月）と脚氣衝心を題材にした作品を発表した。世間では日清戦争に続く日露戦争での脚気による甚大な被害が問題とされ、陸軍への責任追及が巻き起こっており（八五）、「一兵卒」はその惨状を背景に、脚気に罹った一兵卒の（渠^{かれ}）が死んでゆくまでの過程を描いている。「隣室」は旅先で隣り合った旅人の脚氣衝心による死の前後を、語り手の（私）が聞き手に向かって語りだす一人称小説の構成をとっているが、戸松泉は（私）が淡々と眼前の事実を語っているようにみえて、その実（私）の主観的感慨で捉えられた光景であると指摘する。脚氣衝心で苦しみ続ける隣人の声を聞き、痛みにのたうち回る姿を見た（私）は、友人から聞かされて知っていた脚氣衝心に対する恐怖を思い出す。

私は此時不図怖ろしい脚氣衝心のことを思ひ出しました。私の友人で、其病に襲はれて、一夜苦み通しに苦んで死んだといふ話、其苦悶は非常なもので、傍^{はた}の見る眼も堪へられない、死んでも好いから此苦^{くるしみ}をなくして遣り度いと思ふほどであつたとのこと、それがつい私の胸に浮びました。

田山花袋 「隣室」（『新古文林』、明治四〇年一月）（八六）

この（脚氣衝心が即（死）につながる怖ろしい病気であるという認識）があつたからこそ、（私）はその先に待つ死について様々な思いを巡らす。メーテルリンクの戯曲から想起される神秘的、靈的な力を感じ感傷的になる（私）だったが、隣人の（何うかして死ねないかな、

もう好い加減に許して呉れても好きさうなものだナ、あゝつらい、つらい」という、死への恐怖よりも現在の生理的苦痛からの解放を叫ぶ声に、(霊だの、精神だの、理想だのと人間は平生申して居りまして、此の生理的圧迫の苦痛に対してはまことに儂ない意味のない無価値のものではありませんか)と自然の法則に対する人間の無力を思い知らされる(八七)。ここで興味深いのは、初野も脚気衝心に対する恐怖を聞かされているところである。

脚気衝心！ 少女こどもの時から聞いて居る怖ろしい語ことばである、また、東京ことうへ来てからも、二三の学友の此病これに病み、此病これに生命いのちを奪とられたことも覚えて居る。然るに今、自分はこの怖ろしい病気に罹つて了つた。

「魔風恋風」第十七 診断(一)

しかし、その認識があつてもなお初野は(勿論是位で生命いのちに係るなどゝは思はぬ)と意に介さない(第十七 診断(一))。むしろ試験前の悩みの種がまた一つ増えたことに苛立ち、(幾ら病気が怖ろしいと云つて、幾ら生命いのちが惜いと云つて、試験を放棄うつつらかして転地などして居られやうか!)と意気込む初野にとって、現状の差し迫った問題は病気ではなく、六月の卒業試験を乗り越えるまでに必要な金の工面であり、合格してからの療養計画を皮算用する初野からは、死への恐怖などは微塵も感じ取れない。「一兵卒」の(渠)は出征当初は国家への奉仕に燃え、戦友の死でさえも国の名誉だとナシヨナリズムの高揚を感じていたが、自身の

死の前では国家に対する忠誠心などはなんの価値もなくなり、ただ死への恐怖と不安に捉えられていった（八八）。それに比べて、初野は脚気衝心の苦しみに悶えながらも（第三十八執持（三三））、へ芳江様、私はまア、何時まで此様な処に……、入って無きや可けません？と明確な意識の中で死にゆく自分を否定し、へ病院に計し入ってちや……それに、最う試験ですから……とあくまでも肉体の苦痛に打ち克ち、試験の合格に思いを馳せるが、死から逃れられない現実を悟ると、芳江に詫びながらついに力尽きるのであった。

初野の死には、現実の脚気患者が懐いた自殺に駆り立てられるほどの絶望や、啄木と花袋が描いたような恐怖は一切みられない。脚気が当時の国民病であり、死に直面した怖ろしい病という共通認識のもと、読者に対してリアリティを持たせる意味合いがあったならば、天外が写実的描写を宣言している以上、初野はより死への恐怖に怯え、あれほど固執していた信念も投げ捨て、最期はひたすら苦痛からの解放を意味する死を願いながら死んでいったはずである。そうはならず、人間の意識を凌駕するほどの生理的苦痛に立ち向かった初野の病が、働き盛りの男性が罹りやすい脚気だったのは、墮落言説に敗北した女学生ではなく、一人の近代青年の死として昇華させたいという思惑があったのではないか。結末でわざわざへ芳顔院賢誉妙節大姉と法名まで与えたことに、天外の意図を読み取りたいと思う。

おわりに

国家への帰属を求める良妻賢母という規範を保守しようとする女性教育者と、それに対抗して新しい女性の生き方を提示しようとした女性解放論者が交錯していた当時の女子教育界において、初野の生き方が立身出世を求める男性の願望の追従でしかなく、しかもその立身出世の夢も、最後は東吾という男性に奪われてしまったことは、天外ひいては当時の男性作家の限界であったと思われる。さらに、初野が女子教育の先端を担う立場の女学生であり、初野自身もそれに対する気概があるように描かれていながら、実はその設定にはなんらの必然性もない。第一回からの骨折による入院、自宅療養、そして脚気の発症と、初野の行動範囲はほぼ自宅と病院の往復に限られており、極力学校内を描写する必要のない構成にしたのではないかと邪推もしたくなるのだが、この学生らしい生活の希薄さが、題材に対する不勉強という大森の指摘〔注二七参照〕にもつながってくる。初野に向けられる皮相的な墮落女学生の言説も、天外は性的偏見がなかった代わりに、女子教育に対する一家言も持たなければ、当の女学生が非難される要点にすら関心が薄かったといえそうである。

明治三十九年三月、数え年二十の春に目白の学校〔引用者注…日本女子大学〕を卒業しました。その時分は、女子大学卒業ということが何といつてもまだ珍しく、世間の注目をひきました。卒業生たちは、自分たちの一挙手一投足が日本の女子高

等教育の前途を左右するといふので、使命や天職という言葉を使つて、めいめいの将来を興奮して語り合つていました。「中略」多くの人はすぐ結婚していわゆる理想の家庭をつくり、郷土に帰つて女子教育のために働らこう、大陸に渡つて中国の婦人を教育しようなどというふうに若々しい希望と抱負をもつて社会へ巣立つて行きました。

平塚らいてう「私の学生生活」(八九)

平塚らいてうは日本女子大学での女学生生活を回顧した文章でこう語っている。ここで使われている「使命」や「天職」は、成瀬仁蔵が唱えた教育思想の根幹をなす言葉(九〇)であり、当時の日本女子大生に与えた成瀬の影響がいかに根強かつたかを物語っている。明治期の女学生が懐いていた将来への意欲とはおよそこのようなものであった。しかしながら、天外の不見識ばかりを問題にするのは酷であろう。女子職業論が取り沙汰されるようになり、当時の男性知識人の中では最も女子の自立を推進していたはずの巖本善治でさえも、女子の職業選択については具体的な答えを出せなかった。それは現実に巖本が想定しているような女子高等教育と結びついた高度な職業が生まれていなかったからであり、明治一八(一八八五)年に女医第一号の荻野吟子が出てくるまでは、抽象的な論に留まらざるを得なかったのである。ただ、ここから十数年経っていくら女子の職業が多様化したとしても、村上信彦が指摘

するようになり、新しい職業の出現は職業の普及と同じではない。明治期全体でみれば確実に普及したといえるのは小学校教員と女工だが、これらはすでに平凡な職業としてみなされたし、特に女工は女子の中でも差別視された^(九二)。実際には巖本ら女子教育家が求めた高度な職業に就ける女学生はめったにいなかったのだから、いわんや女子教育家でもない天外においてをやである。新聞小説という特殊な連載形態にあって、ことさらその部分に注力して書く必要があったかどうか。

むしろ、注目すべきは初野を立身出世という男性の領域に踏み込ませたことにある。結果的にはそれが失敗に終わったとしても、男性の分野に女性が進出することに対する抵抗が現代の比ではなかった時代に、真っ向から挑んだ天外の試みは、現代においてもなお評価されてもよいと思われる。

注

- (一) 土佐亨「『魔風恋風』考——受容・材源・テキストについてのノート——」『文学と思想』第三九卷（福岡女子大学 昭和五〇年）
- (二) 読売新聞社史編纂室編『読売新聞八十年史』（読売新聞社 昭和三〇年）
- (三) 『読売新聞』明治三十六年二月二二日朝刊
- (四) ① 小杉天外「自序」『魔風恋風』前編（春陽堂 明治三十六年）。〈作中の主人公と二三の主なる人物とは、曾て世に在つた人、それから今現に世に在る人をモデルにした〉
- ② 小杉天外『魔風恋風』のこと「『明治大正文学研究』（東京堂 昭和二七年）※『早稲田文学』大正一五年四月初出。〈万朝報紙上で、本郷森川辺に下宿してゐた或る看護婦が自殺したといふ記事からヒントを得て事実を調べ、それを基として書いた〉
- ③ 小杉天外「解題」『明治大正文学全集』第一六卷（春陽堂 昭和五年）。〈女主人公は当時一二の新聞に報道された、モルヒネ注射の量を誤つて死を招いだ某苦学女学生をモデルにした〉など。
- (五) 藤井淑禎『不如歸の時代』（名古屋大学出版会 平成二年）
- (六) (一)に同じ。なお、天外のそれぞれの証言に齟齬が生じている点について、土佐は〈序やエッセイにおいてとかくもつともらしい大言壮語の調子を帯びること、この作

品が当代社会の生々しい現実を描破する写実主義に基づいていることを鼓吹宣伝する必要があったことなどから、一種のへ呼び水をさして人気をおおる手段としてほらを吹いたのではなかったか」と推測している。

(七) 菅聡子『メディアの時代——明治文学をめぐる状況』(双文社 平成一三年)

(八) 小杉天外「解題」『明治大正文学全集』第一六卷(春陽堂 昭和五年)

(九) 高木健夫『新聞小説史 明治篇』(国書刊行会 昭和四九年)

(一〇) 上司小剣「U新聞年代記」『日本現代文学全集 31』(講談社 昭和四三年) ※『中央公論』昭和八年一月初出。へそれから半歳あまりの後、尾崎紅葉は病氣保養がてら、北越から佐渡ヶ島への旅に出て、「煙霞療養」なる可なり長い随筆をU新聞に載せた。緑雨は緑雨で、作者に手紙を寄せ、例の尻下がりの字で、「いまごろ越後の良寛にてもなかるべく候。……これがいはゆる『文章報国』にても候べきや」などと書いて来た。「煙霞療養」の中に良寛讚美の一条があったのを嘲つたのである。「中略」緑雨はまた「紅葉の座布団芸術」などと手紙に書いてよこしたりした。蓋し、自分の前では弟子に座布団を敷かせぬとか、U社株主の前では自分も座布団を敷かぬとかいふ紅葉の私生活を罵つたつもりであらう。かくして、この両文人は、互ひに憎悪と反感を抱き合ひながら、一方は歯牙にかけぬ、といふ風で、相手にしないし、他方は減多無性に打つかつて行くし。)

(一一) 「学事奨励に関する被仰出書」(明治五年) ※引用は三井為友編『日本婦人問題資料

集成』第四卷（ドメス出版 昭和五一年）に拠る。へ学問は身を立るの財本ともいふべきものにして人たるもの誰か学はずして可ならんや（中略）学問は士人以上の事とし農工商及婦女子に至つては之を度外におき学問の何物たるを弁ぜず又士人以上の稀に学ふものも動もすれは国家の為にすと唱へ身を立るの基たるを知らずして或は詞章記誦の末に趨り空理虚談の途に陥り其論高尚に似たりといへども之を身に行ひ事に施すこと能ざるもの少からず）

(一一) 「「学制」施行に関する当面の計画（文部省）」（明治五年）※引用は三井為友編『日本婦人問題資料集成』第四卷（ドメス出版 昭和五一年）に拠る。へ人間ノ道男女ノ差アル事ナシ男子已ニ有学女子学フ事ナカル不可且人子学問ノ端緒ヲ開キ其以テ物理ヲ弁フルユエンノモノ母親教育ノ力多キニ居ル故ニ博ク一般ヲ論スレハ其子ノ才不才其母ノ賢不賢ニヨリ既已ニ其分ヲ素定スト云ヘシ而シテ今日ノ女子後日ノ人母ナリ女子の学ヒサル可ラサル義誠ニ大イナリトス故ニ小学ノ教ヲ敷キ従来女子不学ノ弊ヲ洗ヒ之ヲ学ハシムル事務テ男子ト並行セシメンヲ期ス）

(一二) 小山静子『良妻賢母という規範 新装改訂版』（勁草書房 令和四年）

(一三) 上田捨吉『日本婦人論』（駿々堂本店 明治二〇年）、中山整爾『日本将来之婦女』（自由閣 明治二〇年）など。

(一四) 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』（黎明書房 平成一〇年）

(一五) 秋枝蕭子「「鹿鳴館時代」の女子教育について」『文芸と思想』第二九卷（福岡女子

大学 昭和四十二年)

(二七) (一五) に同じ。

(二八) (一五) に同じ。

(二九) 吉村寅太郎『日本現時教育』(金港堂 明治三十一年)には、下層の女子は刺繍や裁縫などの実用的な知識を第一に、教育は読書と初歩的な算術程度に留めるべきこと、中層の女子は高等小学校を出て花嫁修業をすべきこと、上層の女子は高等女学校に進んで上流社会にふさわしい教育を身につけるべきことが述べられている。

(三〇) 三好信浩『日本の女性と産業教育——近代産業社会における女性の役割』(東信堂 平成一二年)

(三一) 村上信彦『明治女性史(三) 女の職業』(講談社文庫 昭和五二年)

(三二) 唐澤富太郎『日本の女子学生』(大日本雄弁会講談社 昭和三三年)

(三三) 小栗風葉『青春』(自由書院 昭和二三年)

(三四) 中村都史子『日本のイブセン現象 一九〇六—一九一六年』(九州大学出版会 平成九年) 所収、「イブセン翻訳年表」に拠る。

(三五) (三二) に同じ。

(三六) 池田稔「明治初期女子教育と英語の教授・学習」『日本英語教育史研究』第三卷(日本英語教育史学会 昭和六三年)

(三七) 大森郁之助「『魔風恋風』・幻の『義姉妹』考——明治貝合小説成立前夜——」『札幌

大学女子短期大学部紀要』第二二卷（札幌大学 平成五年）。帝国女子学院の怪しげな設定、が巢鴨であることから明治女学校を挙げているが、帝国女子学院の怪しげな設定、六月という不自然な卒業時期からヘリアリテイ及びアクチュアリテイを強調しているものの、作者はその実、明治女学校と限らず日本女子大と限らず、現実の（女学校）（女学生）について、調査——という程ではない基本的事項の事実確認さえも殆ど行わず、正確な知識を持ち現実を踏まえて描くということには意を用いなかったものと断案したい」と述べている。

（二八） 小山静子「一九〇〇年代の女性バッシング——下田歌子と女学生」『実践女子大学下

田歌子記念女性総合研究所年報』第七卷（実践女子大学 令和三年）

（二九） 紅野敏郎・紅野謙介・千葉俊二・宗像和重・山田俊治編『日本近代短篇小説選 明治

篇1』（岩波書店 平成二四年）

（三〇） 寺田透・村松定孝編『鏡花小説・戯曲選』第八卷（岩波書店 昭和五六年）

（三一） 村上信彦『明治女性史（一）文明開化』（講談社文庫 昭和五二年）

（三二） 夏目漱石『漱石全集』第二卷（漱石全集刊行会 昭和一一年）。なお、引用中の（ヴ
ァ）は原文ではワに濁点。

（三三） 本田和子『女学生の系譜 彩色される明治』（青土社 平成二年）

（三四） 文部省編『学制百年史 資料編』（帝国地方行政学会 昭和四七年）

（三五） 「女子教育 諸大家の談話（三）」『読売新聞』明治三五年一〇月一九日朝刊、女子高

等師範学校校長高嶺秀夫の談話。へ先づ第一地方に於ける良家の子女などが、東京に確たる親戚も、引受人も無いのに、東京へさへ行けば立派な教育が受られると思つて出て来るのが悪いのであります。

(三六) 「女学生の墮落(嘆ずべき哉)」『読売新聞』明治三五年六月二五日朝刊。へ神田本郷辺の下宿屋に寄寓する女学生の中甚だしきに至りては如何はしき破廉恥の所業を働くものさへ少なからぬ。

(三七) 「女子教育 諸大家の談話(二一)」『読売新聞』明治三五年一月一〇日朝刊、跡見女学校校長跡見花蹊の談話。へ下宿屋杯から通つて来る者は今まで一人も入れた事はありません、通学生は必ず親の家か、保証人の処からでなくては、一切許さぬ事にして居ります。

(三八) 村上信彦『明治女性史(二) 女権と家』(講談社文庫 昭和五二年)

(三九) 「女学生の醜聞(続き)」『読売新聞』明治二三年二月二四日朝刊

(四〇) 「女学生の醜聞(続き)」『読売新聞』明治二三年二月二五日朝刊

(四一) 「女学生の醜聞(続き)」『読売新聞』明治二三年二月二七日朝刊

(四二) 稲垣恭子「明治の「墮落」女学生」、柴野昌山編『文化伝達の社会学』(世界思想社 平成一三年)所収。

(四三) (二八)に同じ。

(四四) 山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局 昭和五六年)

(四五) 真銅正宏「小杉天外『魔風恋風』へ通俗性の問題——明治大正流行小説の研究(二)——」『言語文化研究』第二卷(徳島大学総合科学部 平成七年)、のち『ベストセラ』のゆくえ 明治大正の流行小説(翰林書房 平成一二年)所収。

(四六) 「時事」『女学雑誌』第二〇三号(明治二三年三月)

(四七) 白川漁夫「日本新聞記者に望む」『女学雑誌』第二〇四号(明治二三年三月)

(四八) (三八)に同じ。

(四九) 「又しても女学生話」『読売新聞』明治二四年三月一七日期刊

(五〇) 「取消」『読売新聞』明治二四年三月一八日期刊

(五一) 「女学生の弊風(其一)」『読売新聞』明治二四年九月五日期刊

(五二) 「女学生の醜聞に就て」『読売新聞』明治二三年三月二日期刊

(五三) 「女子教育 諸大家の談話(九)」『読売新聞』明治三五年一〇月二七日期刊

(五四) 「女子教育 諸大家の談話(四)」『読売新聞』明治三五年一〇月二一日期刊

(五五) 「女子教育 諸大家の談話(六)」『読売新聞』明治三五年一〇月二三日期刊

(五六) 「ハガキ集」『読売新聞』明治三六年三月二〇日期刊。(天外さん、御願ですから萩原さんを墮落させないで頂戴な、私だんく、嫌気がさして来たわ、ね、ちよいと、よくって? 私本当に心配なの(女子学院同級生))

(五七) 「ハガキ集」『読売新聞』明治三六年三月一六日期刊。(佳人初野が負傷は上膊骨外科頸の骨折なりといへば言ふまでもなく其手は肘関節を九十度の屈位に於て担布

もて頸より保持されてあるべきにかの半古君の挿画の如く直下せしめおくはなほ終生の畸形となるべしア、（一匙庵）

（五八）

馬場伸彦「小杉天外『魔風恋風』をめぐるメディア的トポス」『甲南女子大学紀要 文学・文化編』第四三号（甲南女子大学 平成一九年）。〈物語世界と読者の日常生活を結びつぐためには、記事だけでなく、読者が能動的に紙面に参加する仕組みが求められる。それが読者投稿欄である「ハガキ集」の役割である。すなわち、開かれた言説空間である「ハガキ集」において、読者は、現実と虚構を意図的に緋い交ぜにし、テキストの享受者からテキストの生産者へと立場を変えていくのである。〔中略〕そこには虚構と現実の区別はさほど大きな問題とされないトポスが形成されてきた様子を伺い知ることができる。〉

（五九）

平石典子「「墮落」する女学生——「女学生神話」を巡る考察（二）」『文藝言語研究 文藝篇』第四〇巻（筑波大学文芸・言語学系 平成一三年）。〈彼女には落ち度がなくとも、周囲は彼女を「墮落」と結び付けようとする。作中には、東吾と恋を語る初野の幸せそうな姿は殆ど出てこない。そのかわりに我々の前に繰り返されるのは、「墮落」を期待する周囲の眼と、初野との戦いなのである。〉

（六〇）

（四五）に同じ。

（六一）

（七）に同じ。〈家庭の喪失者である初野が、その家庭の中心にいてさらには将来家庭の維持者となる芳江に刃向かった時に、彼女の敗北は決定的となる。許嫁の東吾

への想いは一途に、そして姉と誓った初野のためにはいかなる自己犠牲も厭わない、疑いや欺きとは無縁の芳江こそ、典型的な家庭小説のヒロインそのものであった。〕

(六二) 天野勝重 「『魔風恋風』論——二人のヒロイン——」 『国文学研究ノート』 第三六卷 (神戸大学「研究ノート」の会 平成一三年)。〔初野は旧来のヒロインの枠、芳江が貫き通したのから飛び出しかけているのである。しかし、芳江の遺書によって初野は改心することで芳江にイニシアチブは移り、初野は枠の中に戻されてしまうわけである。こうして初野は新しいヒロインに成り損ねる。〕

(六三) 大屋幸世 「魔風恋風 (小杉天外)」 『国文学 解釈と鑑賞』 第四五卷五号 (至文堂 昭和五五年)。〔初野の「独立心」は、先にも指摘したように、それを貫き通して生きることは、ほとんど不可能に近い。その点で言えば、それは単なる観念でしかない。〕

菅の(七)にも大屋をふまえた指摘がされている。

(六四) 北原泰邦 「明治女性作家における「立身出世」の表現——田辺花圃『藪の鶯』を中心に——」 『國學院大學紀要』 第四二卷 (國學院大學 平成一六年)。三人の女性を中心に、明治における女性の立身出世を提示しようとしているものの、いずれも物語の主体的立場は与えられず、男性主人公である篠原勤の視点を通じた男性原理中心の物語構造が貫かれていると述べている。

(六五) 竹内洋 『日本人の出世観』 (学文社 昭和五三年)

(六六) (六五) に同じ。

- (六七) (二〇) に同じ。
- (六八) (二〇) に同じ。
- (六九) 三神和子「欧米における「新しい女」の誕生——イギリスの場合」、「新しい女」研究会編『『青鞥』と世界の「新しい女」たち』（翰林書房 平成二三年）所収。
- (七〇) 平塚らいてう「原始女性は太陽であった」『女性の言葉』（教文社 大正一五年）
- (七一) 平塚らいてう「世の婦人たちへ」『女性の言葉』（教文社 大正一五年）
- (七二) 平塚らいてう「差別的性道徳に就いて」『婦人公論』大正五年一〇月※引用は『女性の言葉』（教文社 大正一五年）に拠る。
- (七三) 平塚らいてう「処女の真価」『新公論』大正四年三月※引用は『女性の言葉』（教文社 大正一五年）に拠る。
- (七四) 岩淵宏子「『青鞥』と日本女子大学校——平塚らいてうと成瀬仁蔵」、「新しい女」研究会編『『青鞥』と世界の「新しい女」たち』（翰林書房 平成二三年）所収。
- (七五) 山下政三『明治期における脚気の歴史』（東京大学出版会 昭和六三年）。山下の作成した表によると、明治三六年の死亡者数が肺結核六七二二人、脚気一〇七八三人。赤痢の七一七二人、コレラの一四〇人などその他の伝染病に比べても肺結核に次いで多いことがわかる。
- (七六) 山下政三『鷗外 森林太郎と脚気紛争』（日本評論社 平成二〇年）
- (七七) 福田真人『結核という文化 病の比較文化史』（中公新書 平成一三年）

(七八) (七)に同じ。

(七九) スーザン・ソング著、富山太佳夫訳『隠喩としての病・エイズとその隠喩』（みすず書房 平成一八年）

(八〇) 池田功「脚気の文化史——啄木詩「夏の街の恐怖」を分析しつつ——」『明治大学人文科学研究所紀要』第五四卷（明治大学人文科学研究所 平成一六年）。へとにかく夏の街の恐怖を描くためには脚気による死者が必要だったかのように唐突に記される。この時代においてはそのことで共通の認識が得られたのであろう。」

(八一) 小田切秀雄編『明治文学全集 52 石川啄木集』（筑摩書房 昭和四五年）

(八二) 内閣統計局『分量的ニ觀察シタル脚気』（内閣統計局 明治三九年）

(八三) (六三)に同じ。へ帝国女子学院の創立十周年祝賀会の開かれた二月二十六日から、初野が「越前堀の唯ある私立病院」で脚気衝心のために死ぬ、六月の卒業試験の日ほど前の日までである。「中略」はじめ小杉天外の頭には、新聞の連載期間と小説の内の時間とをほとんど重ね合わせようとする意図があったのではないかと思われて来る。」

(八四) 小林一郎『田山花袋研究 博文館時代1』（桜楓社 昭和五三年）

(八五) 内田正夫「日清・日露戦争と脚気」『東西南北』（和光大学総合文化研究所 平成一九年）。へ全傷病者三五万二七〇〇余人中、脚気患者は内輪にみて二一万一六〇〇余人、他病に算入されているとみられるものを含めて推定すれば少なくとも二五万人に

達する。戦病死者三万七二〇〇余人中脚気による死亡者二万七八〇〇余人（約七五％）であった。「中略」海軍はもともと兵員数が陸軍より一ケタ少ない。そのことを考慮に入れても、日清戦争における海軍の脚気患者は三四名、死亡者ゼロであったことは注目に値する。日露戦争でも、脚気患者八七名、死亡者三名にすぎなかった。

（八六） 田山花袋『花袋集』（易風社 明治四一年）

（八七） 戸松泉「隣室」から「一兵卒」へ——脚気衝心をめぐる物語言説——『日本近代文学』第五三卷（日本近代文学会 一九九五年）

（八八） （八七）に同じ。

（八九） 阿部知二・清水幾太郎編『女学生ノート』（新評論社 昭和三〇年）

（九〇） 成瀬仁蔵『新時代の教育』（博文館 大正三年）。（教育に於ては、学生を指導して、各自の使命天職を発見せしめ、之を實現する方法を自得せしむるを以て、重大事と為す。）

（九一） （二一）に同じ。